

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第15号

《研究ノート》

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和

南さつま市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

岩川官軍基地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の基地の配置—

湯場崎 辰巳

令和3年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2023. 3

『縄文の森から』第15号 目次

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広・・・・・・・・ 3

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和・・・・・・・・ 19

南さつま市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之・・・・・・・・ 29

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文・・・・・・・・ 33

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 43

令和3年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

Emergence and Development of Pointers in Kagoshima Prefecture

Kurokawa Tadahiro

要旨

本稿では、鹿児島県における尖頭状石器の出土事例をまとめ、その特徴を整理した。そして、尖頭状石器周辺から出土する土器の特徴等から、出現期を縄文時代早期中葉と位置づけ、早期末まで出土する石器であることを指摘した。

キーワード 縄文時代早期中葉 尖頭状石器 尖頭器 押型文土器

1 はじめに

鹿児島県の縄文時代早期前半には、角筒形という全国的にも例を見ない器形に代表される南九州貝殻文系土器がある。早期後半になると、平椀式土器や塞ノ神式土器といった一群が多種多様な遺物と共に出土する。その中間にあたる早期中葉には、押型文土器や中原式土器といった他地域の土器が南九州でも出土し、その受容と展開に関しては研究の途上にある。このような、器形と文様等の属性分析を進めた土器研究に対し、石器研究はどちらかと言えば低調で、小稿で扱う尖頭状石器も例外ではない。

筆者は、霧島市上野原遺跡の報告書において尖頭状石器を取り上げ、「貝殻文と押型文との関係を解明する手がかりとなる石器である」と述べたことがある(黒川2000)。それから20年が経ち、志布志市有明町に所在する春日堀遺跡の報告書作成に従事する機会を得、多量の尖頭状石器を目の当たりにすることが出来た(公財セ2022)。しかしながら、報告書では基礎資料の提示のみで、十分に考察できたとは言いがたい。

そこで、小稿では、鹿児島県における尖頭状石器の現状を把握し、その時間的な位置付けについて検討することを目的とした。

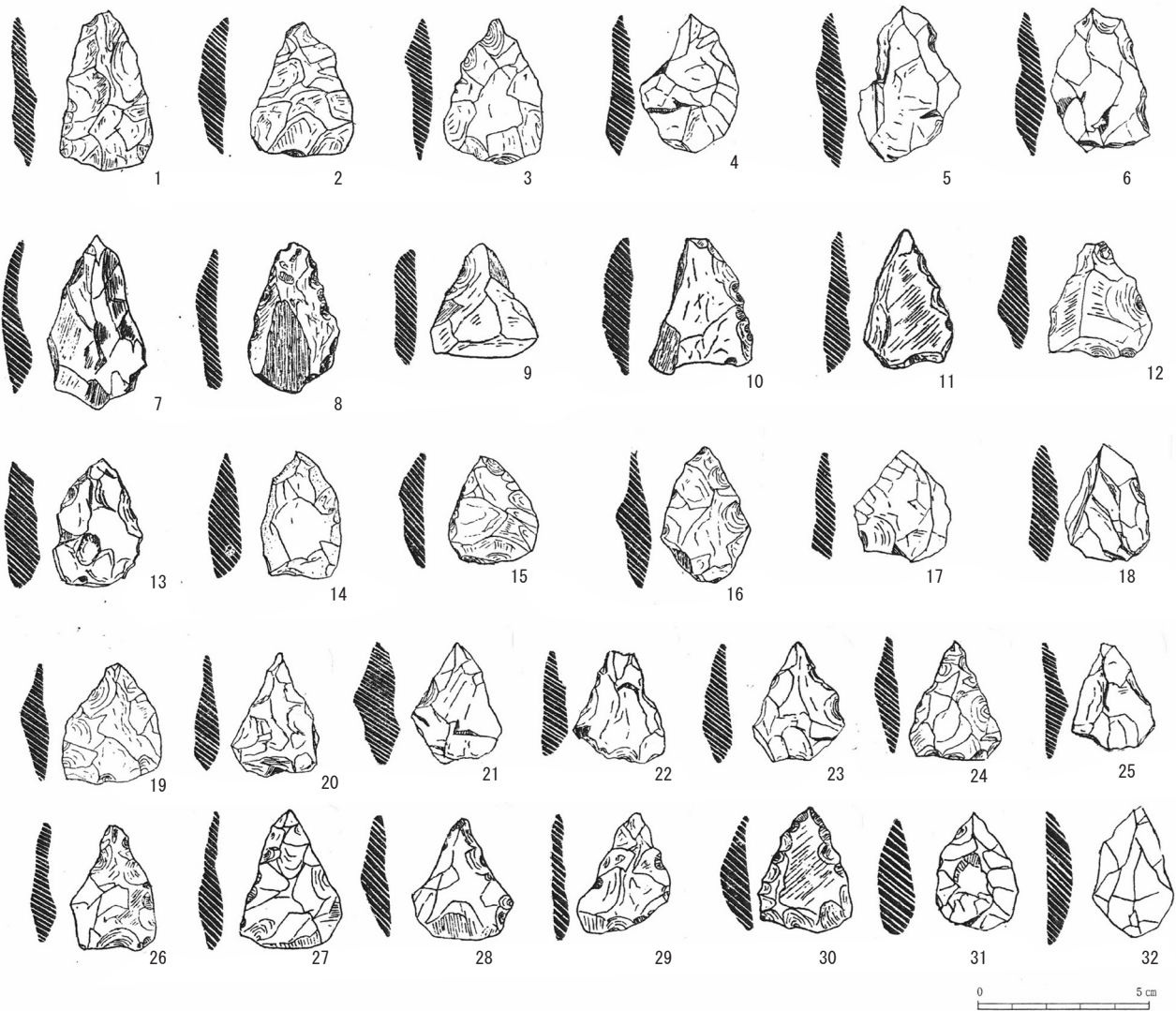
2 研究史

尖頭状石器とは、大分県速見郡日出町早水台遺跡において、尖頭石器として紹介されたものである(八幡・賀川1955)。設定以来、大分県を中心に縄文時代早期遺跡の報告書で尖頭石器あるいは尖頭状石器として紹介されてきた。早水台遺跡では、「三角形をなして、先端が剥取りなどで尖頭状をなし、明かにその部分を使用した」ものとして、5つに細分された。「a式」は、「一面に剥離面を残し他面は数回の打欠を加えて、其の先端を尖頭状に加工」するもの(第1図1~8)。「b式」は、「一面には一時的な剥離面を残し、他面には更に頂上より強度な打撃を加えた痕と見られる平坦面を残し数条の剥離面を修正することなく残している。先端は剥離の際

生じた尖頭を利用し、多少修正を加えたもの」で、「二次的な剥離面を一面にそのまま放置している」もの(第1図9~12)。「c式」は、「丸みを帯び先端が栗状に尖っている」もの(第1図13~19)。「d式」は、「錐状に尖った先端部を有し、比較的大きい剥片を入念に打ち欠き、その先端を細く尖らせたもの」である(第1図20~26)。「e式」は、「錐状の尖頭を有する」が、「d式と異なる点は周縁が非常によく修正されている」ことで、「底部はや丸みを帯びる」もの(第1図27~32)。これらは石材についても、「黒曜石の使用が皆無」であることを指摘した。用途は、a b c式はスクレイパーを兼ね、d e式はポイントと指摘し、これらは、「押型文土器に共伴する石器」として定義された(八幡・賀川1955)。

その後、大分県杵築市稲荷山遺跡においては、チャート製の石鏃を黒曜石製のものと比較し、「やや大型で挟入の深い脚部の発達した精巧な作りのグループ」と「基部挟入のない大形で幅広のグループ」に分け、後者について「早水台遺跡において分類している尖頭石器」に類似する点を述べ、重量から「鏃として同一視すべきではないかも知れない」と指摘した(横山1970)。

これらの調査を経て、大分県直入郡荻町(現在の竹田市)政所馬渡遺跡では、「使用素材が、厚味のある破片であったためか、断面は厚い」尖頭形石器と、「柳葉状」の形状であり現在石槍に分類されるものと同様に分類して報告された(井ノ上1982)。これを軸に、報告書の総括では、「尖頭形石器は、瀬戸内地方の押型文土器出土遺跡からも知られ、西北九州地方にも、多くの尖頭形石器を出土する遺跡が、分布している」ことを述べ、「西北九州の影響を考えなければならない」と指摘した(賀川・下村1982)。このように、尖頭状石器の研究は、大分県を中心に進められ、坂本嘉弘氏の菅無田遺跡の指摘によってまとめられることとなる。大分県大野郡野津町(現在の臼杵市)に所在する菅無田遺跡をまとめた坂本氏は、「尖頭石器、へう状石器、尖頭形石器、円基式石鏃と呼ばれる一群で、瀬戸内海や西九州等の早



第1図 早水台遺跡の尖頭石器

期遺跡で出土すること、「形体は縦長，横長比を見ると，縦長がやや優位な二等辺三角形を呈する。基部は若干平基が混じるが，大半は円基である」こと，石鏃などと比較して，「完形遺存率が非常に高い」こと，「量的にも石鏃と同等程度が製作されていることから，単に石鏃の一形式とは考えられず，別器種として把握される」ことを指摘した上で，「押型文土器に伴う定形石器」であるとした（坂本1986）。

大規模開発が急増する1990年代になると，出土事例は九州各地で見られるようになり，鹿児島においても認識されるようになっていく。ここからは，鹿児島県の状況を報告書を中心に整理していく。

霧島市上野原遺跡10地点では，「やや厚めの剥片を素材とし，全体的におおぶりである。調整の仕方も他と異なり，ラフな器面調整と周縁の細かな調整で先端部を作る」とその特徴をまとめている（富田2001）。これを

石鏃Ⅱ類と分類し，いわゆる石鏃であるとしながらも，「形態的にも，調整のあり方からも西北九州の縄文後期以降に見られる石鏃となら変わることはないが，時間的に掛け離れていることや漁労具として分類するための積極的傍証に欠けることから，先の基準に基づいて石鏃と分類」したことを述べている。

霧島市上野原遺跡2～7地点では，尖頭状石器について「押型文土器と共に出土することで知られている。粗い剥離と厚みのある特徴から，石鏃に形態的に類似するが用途は異なると考えられている」とした（黒川2002）。

始良市建昌城跡では，尖頭状石器を「肉厚で尖頭状の先端を伴う木葉形の平面形の石器」とし，「石鏃とは違い明確な基部を作り出さない点を重視」している。その上で，尖頭状石器や石鏃状磨石を挙げて，「時期を特定することは難しい状況にあるが，特定の時期の石器組成

を特徴づけている可能性がある」ことを指摘した（上杉2005）。

霧島市城ケ尾遺跡では、VI・VII層及びV層出土の石器において尖頭状石器を挙げている。この中で、VI・VII層が縄文時代早期に該当し、4点が図化されている。「二次加工の特徴や形態的特徴から石鏃と様相の異なる資料」を分類し、「最大長が20mm以上で基部がすぼまる形状に加工」するものとしている。この他に大型の石鏃として最大幅が20mmを越え分厚く整形されるものについて「大型石鏃」の類を設定している（馬籠・長野2003）。

薩摩川内市山口遺跡では、「ラフな剥離によって器面調整を行ういわゆる石銛型の石鏃」として石鏃の範疇で紹介された（富田2013）。

秋成雅博氏は、船引地区における様相をまとめ、「早期中葉以降の土器が主体となる遺跡では出土量が多い印象」と「定義が曖昧で、なお且つ用途等も不明瞭」と指摘し、「本石器の検討は当時の生業にかかわる問題となる可能性があり、今後定義等を明確にした上で」明らかにする必要を言及した（秋成2015）。

鹿屋市田原迫ノ上遺跡では、尖頭状石器の特徴を「先端の尖った石器で、剥片を素材とし、押圧剥離によって形状を整える。形状は石鏃もしくは石鏃の未製品に類するが、厚みがある」と紹介した（徳永・平2017）。

堂込秀人氏は、磨製石鏃を考察する中で、「尖頭器の小型のものは、石鏃よりやや大ぶりのもので石銛状であるとして、器種の消長を表で示した。この中で、石銛は草創期から早期後葉の塞ノ神式土器まで見られるとした（堂込2019）。また、南九州の縄文時代早期の石鏃を編年する際に、「石坂式土器の頃までは、石槍や石銛がかなり顕著で、その後は減少する」とより踏み込む（堂込2020）。堂込氏の指摘する石銛が筆者の言う尖頭状石器と同じものを指すかは不明だが、石器器種の消長を土器型式と組み合わせた点は、長らく低調だった南九州の石器研究を再び注目させるきっかけとなった。

大崎町荒園遺跡では、「尖頭器」として石鏃と明確に区別し紹介している（堂込ほか2022）。その中には、石銛の形状を呈する資料も含まれている。

志布志市春日堀遺跡では、「尖頭状石器は、多くの場合、石鏃未製品と報告されている例が多い」という現状を述べ、比較的大型の石鏃の重量と、尖頭状石器の平均重量とを比べ、尖頭状石器が石鏃よりも重いことを指摘した。そして、尖頭状石器の中で、最大長が2cm程度の比較的小さなグループでも平均重量が重く、自ずと厚みがあることを示し、「厚手の剥片を素材とし、縁辺部を大きく剥離している。押圧剥離をあまり用いないこともあり、素材中央部に厚みが残ることもあり断面は厚い」という特徴を改めて述べ、「大分県菅無田遺跡において坂本氏が指摘した傾向に概ね合致する」点と「尖頭状石器が出土している遺跡を概観すると、押型文土器が出土している遺跡に多く見られ」、押型文土器と共に出土する石器として指摘した（黒川2022）。

3 尖頭状石器の特徴

ここでは、尖頭状石器の特徴について先行研究や先に挙げた調査報告による事例や分析を元に整理する。

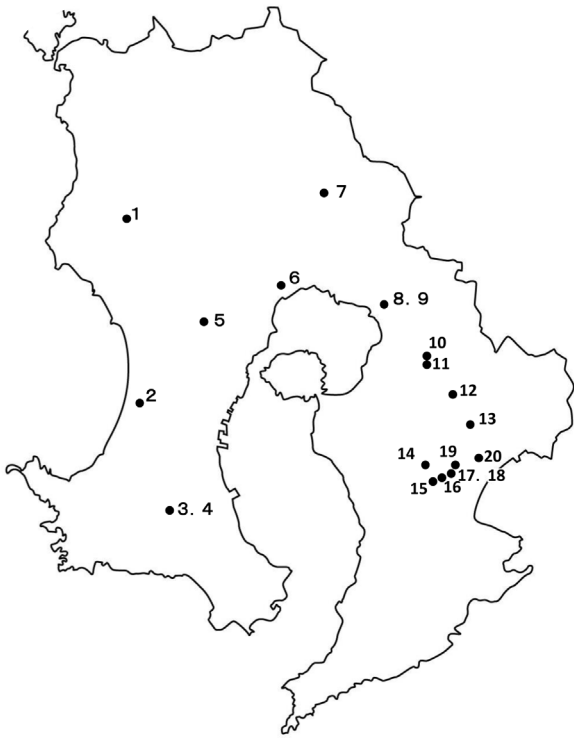
はじめに、形状を整理すると、やや長めの正三角形から二等辺三角形より短いものが多く、短軸を1とした時、対する長軸は数例を除いて1.5以下となり、槍先や長身鏃程の形状とはならない。1つ1つの剥離面が大きく、素材面を残すものも見られるなど、調整は石鏃ほど入念には行われな傾向にある。このため、断面観がきれいな紡錘形になるものは少なく、凸凹とした印象に仕上がる。厚みは、石鏃よりも厚く、短軸の半分程に近いものもあるため、コロコロとした印象を受ける。この厚みは、先端部に比べて中央から基部にかけて極端に厚く、また、最大厚は、中央よりもやや基部側になるものが多い。この場合、断面形状がシイの実状を呈する。先端部は、石鏃や尖頭器と同様に鋭利で、突き刺すことを目的としていると理解出来るが、必ずしもいねいな作出ではない。基部は、平基やわずかに円基を呈するもの、小さな抉りを施すものが見られる。これは、坂本氏が「大半は円基」と指摘した状況（坂本1986）とはやや異なる。本県においては、平基を呈するものも一定数存在し、具体的な比率は不明ながらも、平基と円基状を呈するものが多く、抉りを施すものは少ない傾向のようである。この平基と円基の差は、大ぶりの剥離の影響が大きいと考えられ、両側端部の加工においてこのことが作用したと考えたい。形状はこのように整理できるが、一方でスクレイパーや石鏃未製品との区別は難しく、尖頭器等との境界も難しい。このため、小稿では尖頭状という表現を用いており、将来機能面が明確になった場合、ふさわしい名称が付与されることを期待する。また、近年の調査において、早期の各時期では木葉形の尖頭器の出土事例が増加しているが、この点は別稿で検討したい。

次に、この特徴を元に鹿児島県下の尖頭状石器出土遺跡をまとめてみたい。報告書に掲載されているものを中心に可能な範囲で実見し、出土遺跡を表1・第2図のとおりまとめた。第4～6図はその主な実測図で、表2・3が観察表である。第3図で使用石材について見ると、チャートが多く、坂本氏の指摘と同様の結果が導き出される（坂本1986）。一方で黒曜石の利用も一定数認められることから、非黒曜石の石材利用を意識しながらも、柔軟に獲得できる石材を用いていると言えよう。確認出来たものについて石材別にその割合を示したものが第3図である。

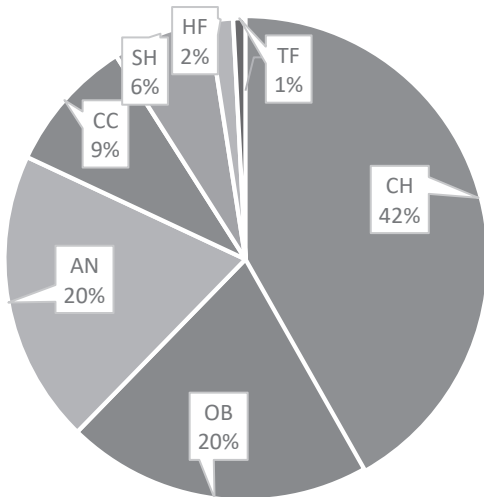
次に、出土遺跡の分布を見ていきたい。筆者が知り得た限りでの遺跡数であり、どの程度実態に迫れたかやや不安であるが、薩摩半島と大隅半島間わず広範囲に分布している状況が認められる。特に大隅半島に多いが、これは、近年の発掘調査の件数が大隅半島に多いということが考えられ、地域的な偏りはほとんど見られないと推察する。加えて、沿岸部や山間部と言った地理的環境の

表1 尖頭状石器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地
1	山口遺跡	薩摩川内市都町
2	桜谷遺跡	南さつま市金峰町大野
3	南一ノ谷遺跡東側	南九州市知覧町東別府
4	前原遺跡西側	南九州市知覧町東別府
5	湯屋原遺跡	鹿児島市郡山町東俣
6	建昌城跡	始良市始良町西餅田
7	中尾田遺跡	霧島市横川町中ノ
8	上野原遺跡4地点	霧島市国分上野原縄文の森
9	上野原遺跡10地点	霧島市国分上野原縄文の森
10	城ヶ尾遺跡	霧島市福山町佳例川
11	桐木耳取遺跡	曾於市末吉町諏訪方
12	出水平遺跡	曾於市大隅町月野
13	蕨野B遺跡	志布志市松山町新橋
14	天神段遺跡	曾於郡大崎町野方
15	田原迫ノ上遺跡	鹿屋市串良町細山田
16	細山田段遺跡	曾於郡大崎町西持留
17	永吉天神段遺跡	曾於郡大崎町永吉
18	荒園遺跡	曾於郡大崎町仮宿
19	浜場遺跡	志布志市有明町野神
20	春日堀遺跡	志布志市有明町蓬原



第2図 尖頭状石器出土遺跡位置図



第3図 使用石材の状況

差もないようである。このことから、本県における石器の一器種として位置付けが可能であると言えよう。

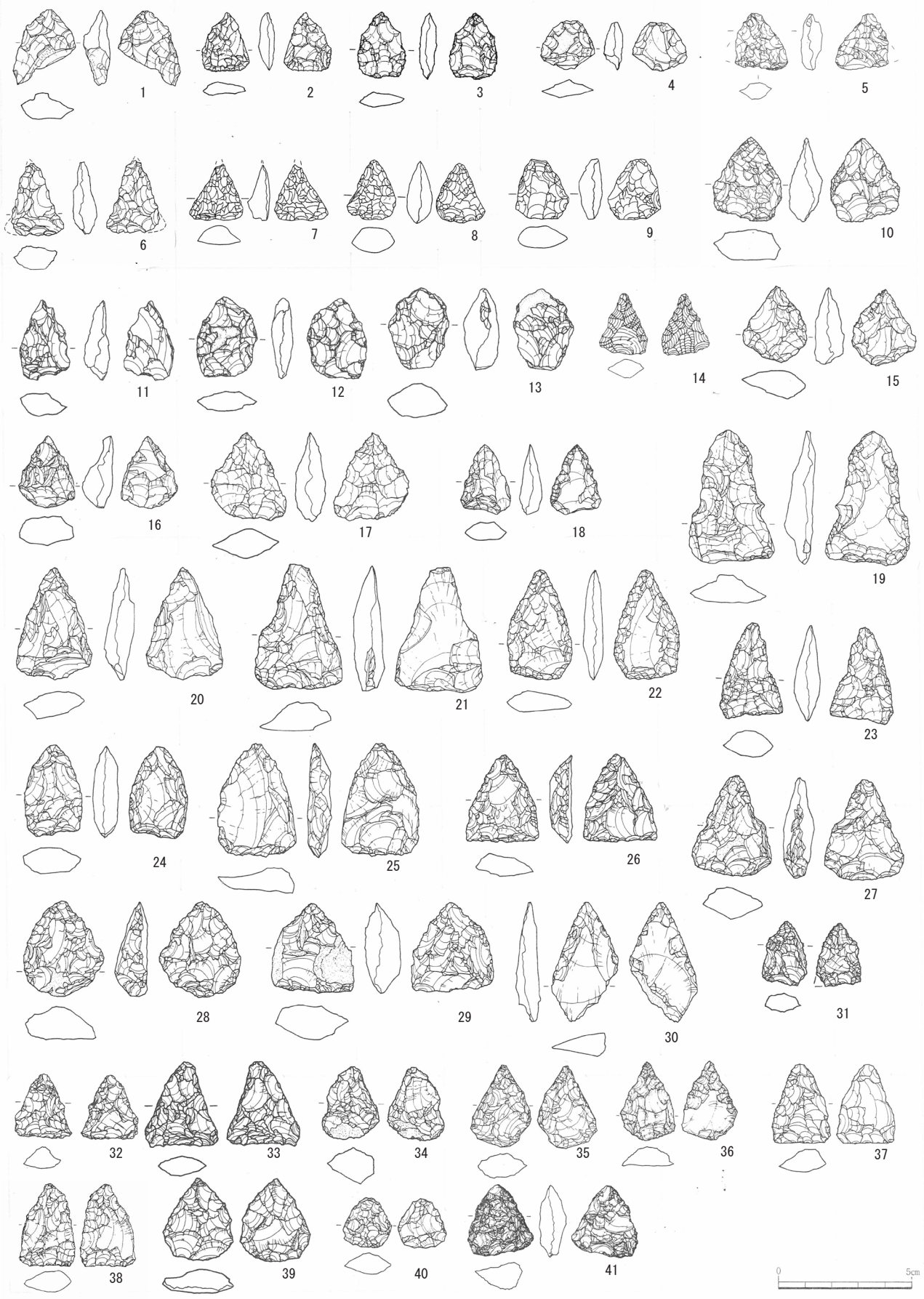
4 尖頭状石器と土器型式

ここでは、尖頭状石器がどのような土器型式と共に出土しているかを整理する。鹿児島県では、桜島テフラである薩摩火山灰層と鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰

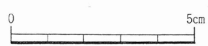
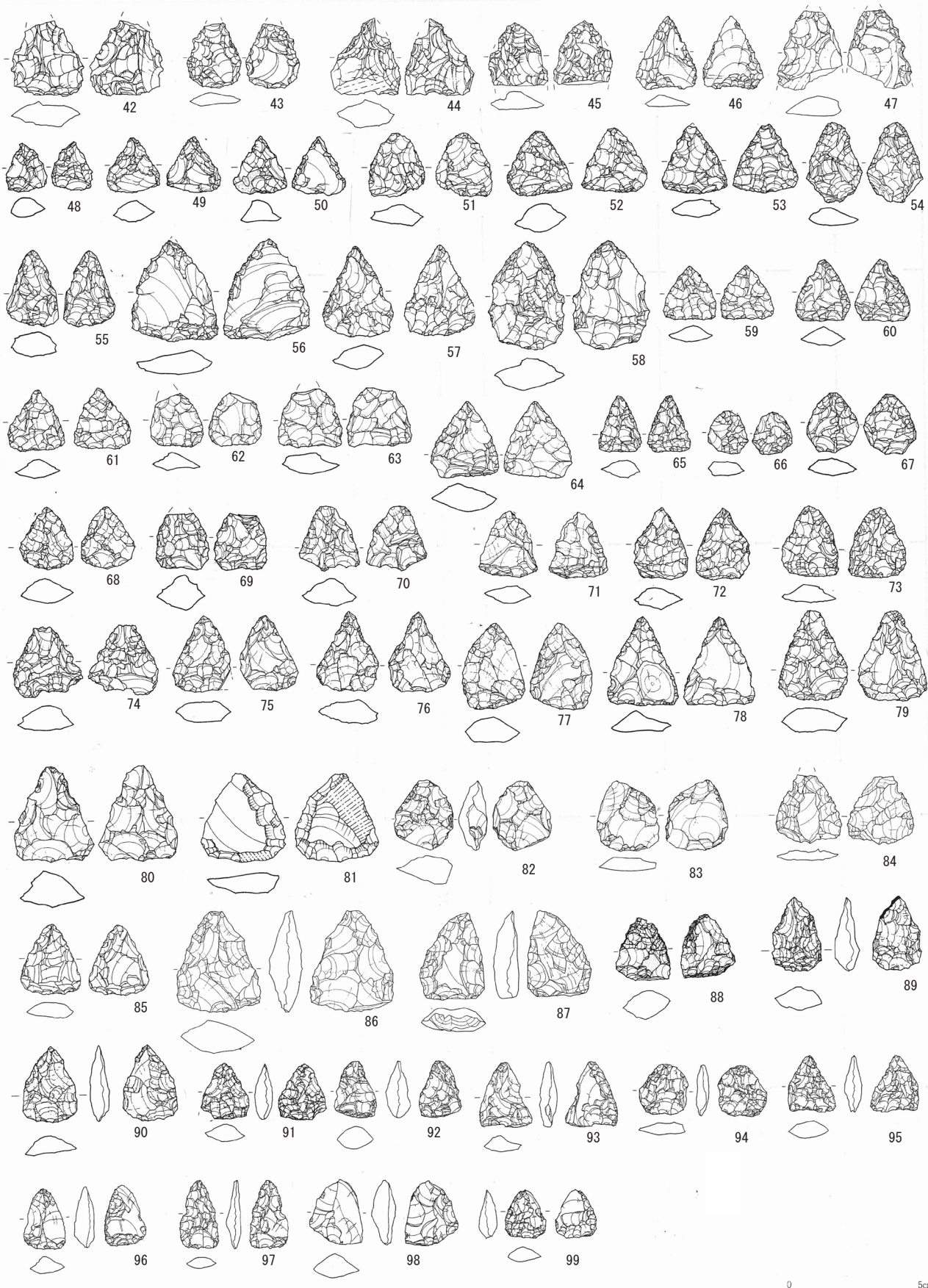
層とに挟まれた層を縄文時代早期の遺物包含層として広く認識している。両者に挟まれたこの層からは、多くの場合、早期前葉から後葉にかけての複数の土器型式が混在して出土する。上下2層に分層出来る遺跡もあるが、この場合下層の黒褐色土層からは前葉から中葉の土器が、上層の茶褐色土層からは中葉から後葉の土器が出土する傾向がある。だが、厳密に尖頭状石器に伴う土器型式を特定することは難しい。その中であって、平面分布などから比較的時期を絞り込める可能性のある遺跡が認められる。よって、これらの遺跡を抽出し、その出土状況等を紹介していきたい。

山口遺跡（第7図）

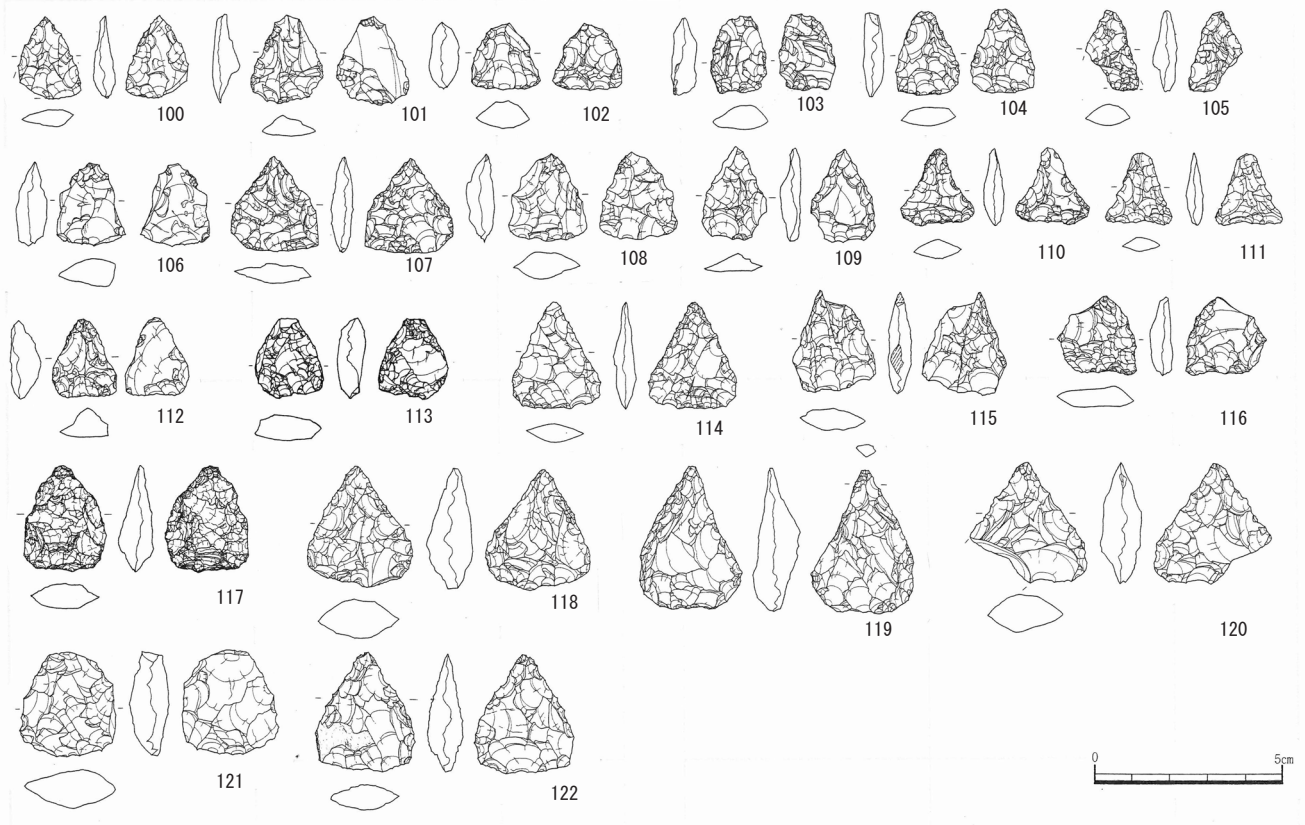
薩摩川内市都町に所在する。土器は1類から7類に分類され、このうちの7類が当遺跡の主体を成す。この7類は細部の特徴からさらに9つに分けられているが、これらの土器はいわゆる二重口縁の塞ノ神式土器である。石器は、4箇所所石材の集中ブロックを検出し、このうち隣接する第1ブロックと第2ブロックの中間地点から1点が出土している。この資料と同一区から出土している土器を観察表から抽出すると第7図に掲載したとおりとなり、この多くは7類である。よって、当該資料は二重口縁の塞ノ神式土器期と絞り込むことが出来る（鹿理セ2013）。



第4図 鹿児島県下の尖頭状石器①



第5図 鹿児島県下の尖頭状石器②



第6図 鹿児島県下の尖頭状石器③

上野原遺跡4地点(第8図)

霧島市国分に所在する。第4地点は、国指定史跡の範囲である2・3地点の東に浅い谷を挟んで隣接する。土器は、倉園B式土器と石坂式土器、辻タイプ、下剥峯式土器をわずかに含むが、桑ノ丸式土器と押型文土器を中心に、平椀式土器と塞ノ神式土器もわずかに出土している。尖頭状石器は4点確認出来る。加栗山式土器や吉田式土器といった南九州貝殻文系土器は出土しておらず、時期を中葉から後葉に絞ることの出来る遺跡である(鹿埋セ2002)。

城ヶ尾遺跡(第9図)

霧島市福山町に所在する。遺跡は、A・B・Cの3つの調査区に分かれる。土器は、IからX類に分類されている。このうち、IからIII類は前平式土器、吉田式土器、石坂式土器で、B・C区に集中し、A区にはわずかに数点出土するにとどまる。一方のA区には、中原式土器や押型文土器、手向山式土器・平椀式土器・塞ノ神式土器などが出土し、このA区に尖頭状石器4点が確認出来る。さらに、C3・D2区とE・F6区の2箇所出土が分かれ、塞ノ神A・B式土器を中心とする環状分布と重なる(鹿埋セ2003)。

出水平遺跡(第10図)

曽於市大隅町に所在する。土器は12類に分類されている。南九州貝殻文系土器の中でも後半の一群である下剥

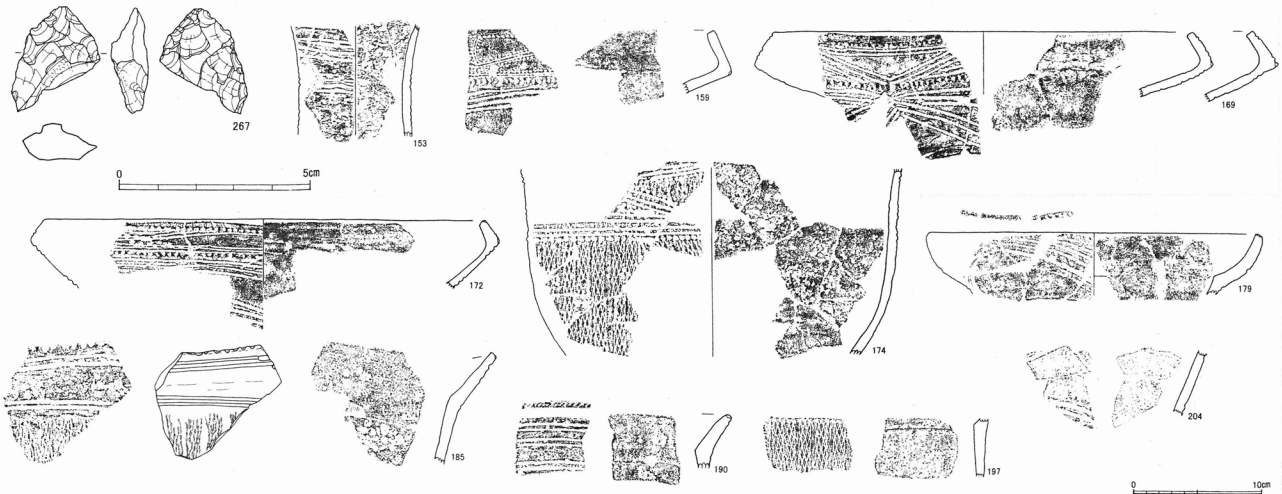
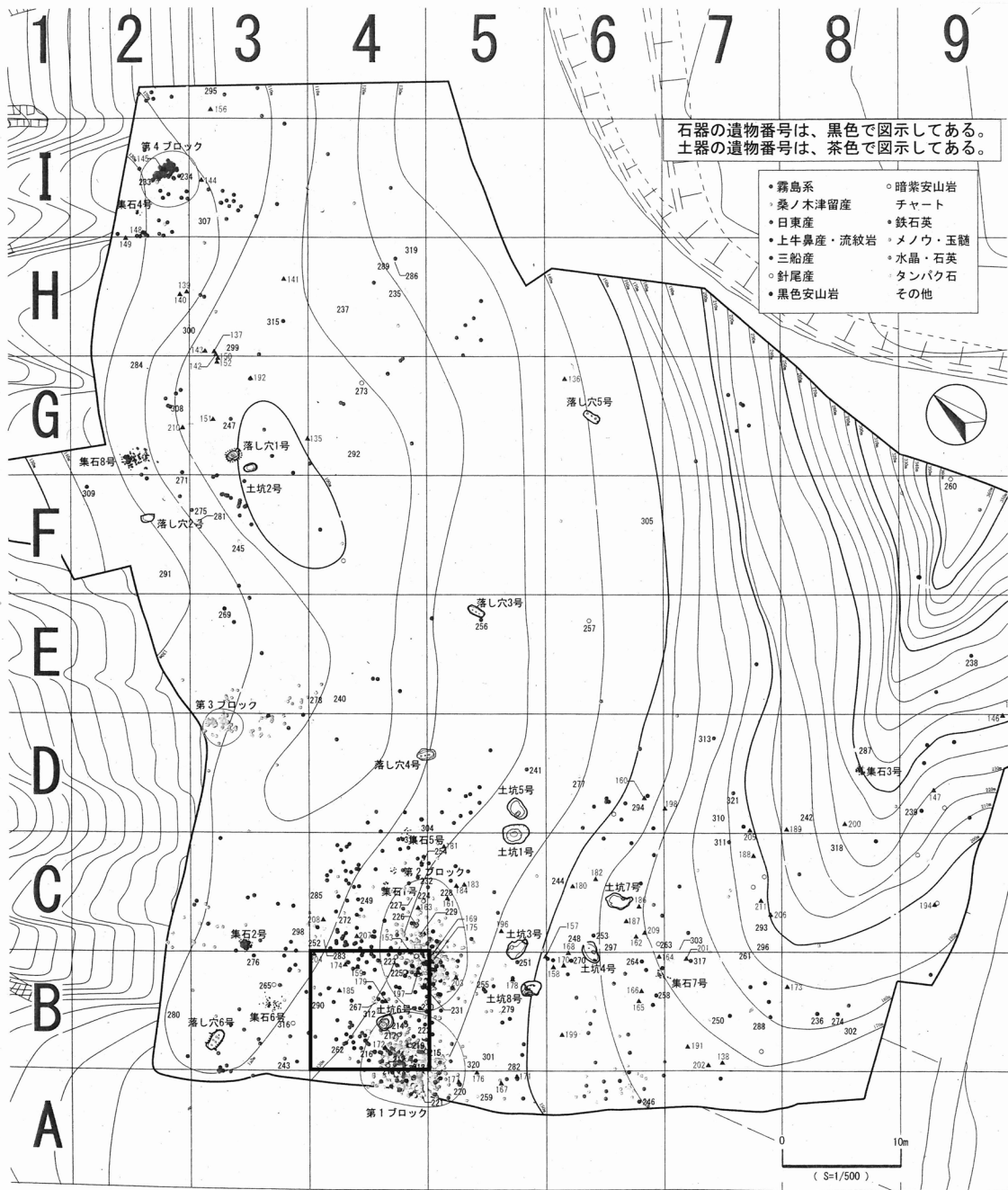
峯式土器や桑ノ丸式土器が出土しているが、約4割が押型文土器である。これらの土器の包含層は、VII・VIII層であり、この層から尖頭状石器1点が確認出来る(鹿埋セ2002)。

蕨野B遺跡(第11図)

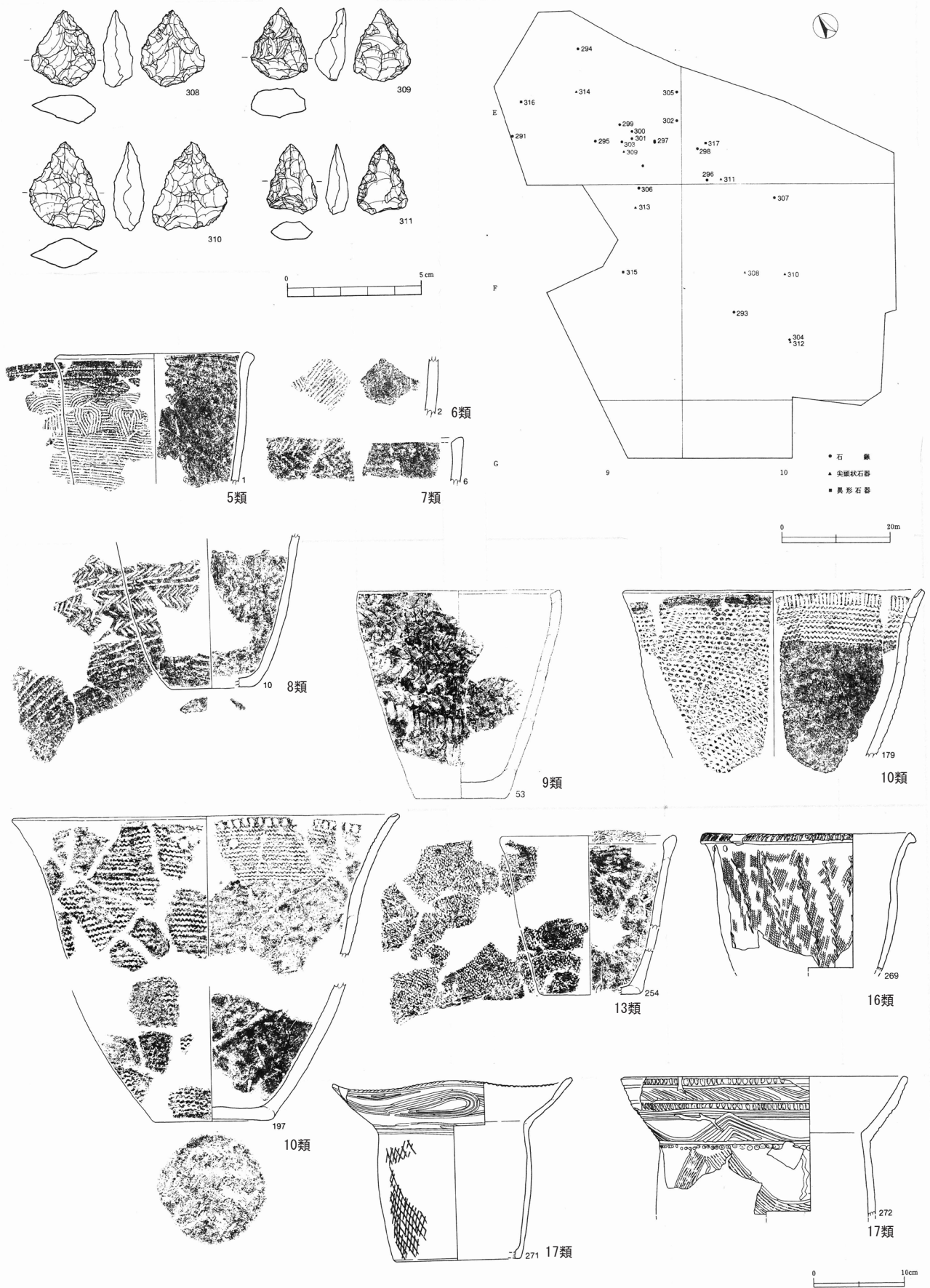
志布志市松山町に所在する。土器はI類からXIII類に分類され、前葉から後葉の各土器型式が出土している。石器は、4つのエリアに大別され、さらに18のブロックが確認されている。尖頭状石器は、遺跡全体で6点報告されている。これらの内、第1エリア第2ブロックでは、1点の尖頭状石器が出土しており、土器は、XII・XIIIb類土器のみが出土し、時期を絞り込む良好な出土状況と言える。このブロックは、C・D-5・6区であり、ここから出土した土器は第11図に示したように変形撚糸文土器とその底部である。よって、この尖頭状石器は変形撚糸文土器が顕著に見られる手向山式土器期のもものと絞られよう(鹿埋セ2007)。

5 鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

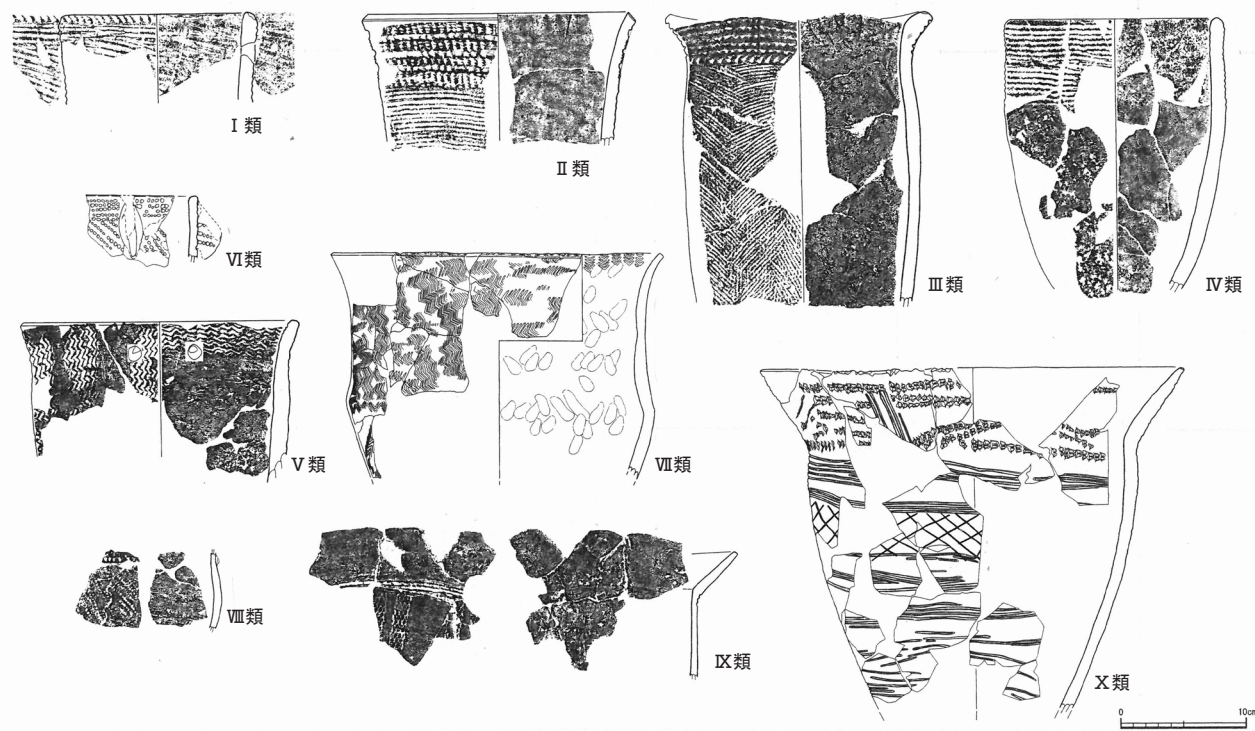
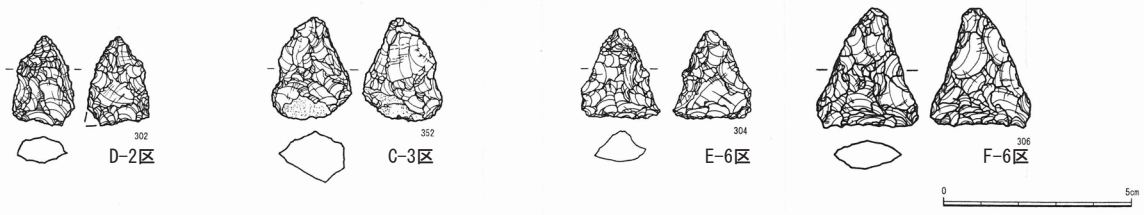
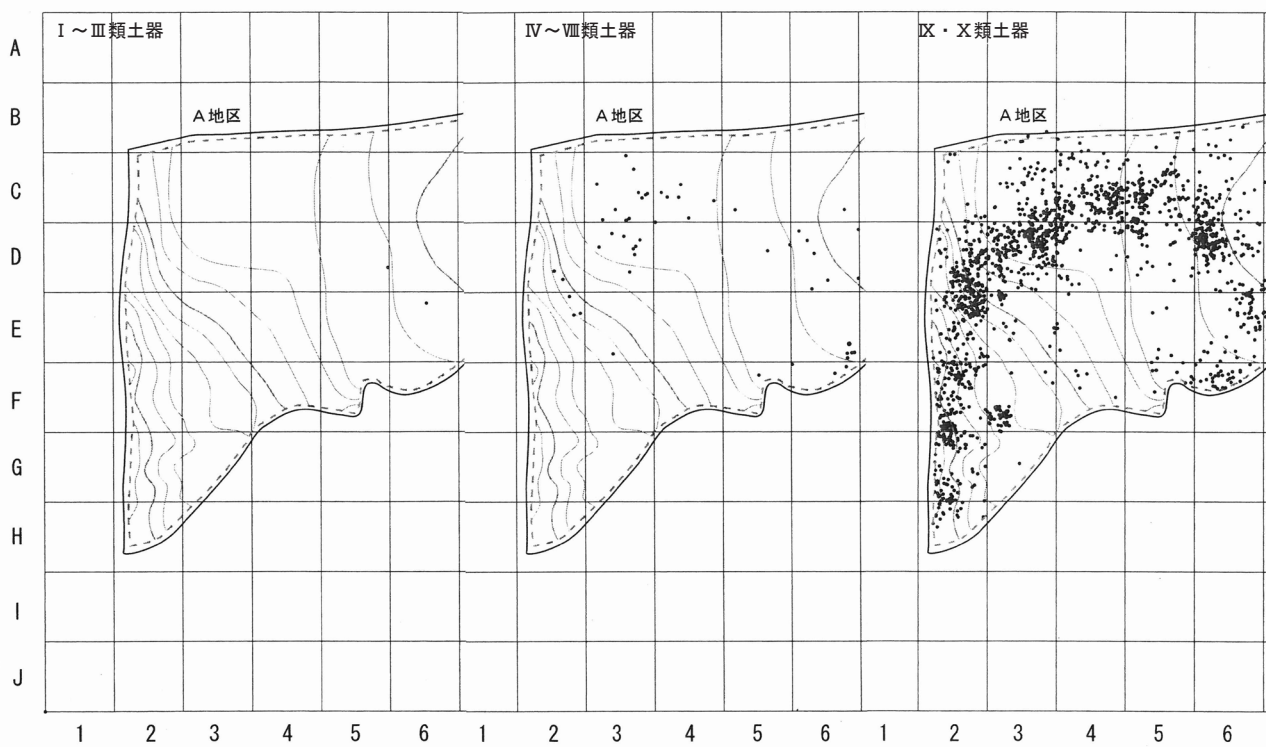
各遺跡ごとの尖頭状石器と土器型式の出土状況を見てきた。現時点では、明確に時期を特定できる資料は少ないながらも、早期中葉から後葉を通して形状変化が少なく、また、その期間を通じて存在していた可能性が見えてきた。繰り返しになるが、城ヶ尾遺跡や上野原遺跡4地点のように、南九州貝殻文系土器の岩本式土器から吉



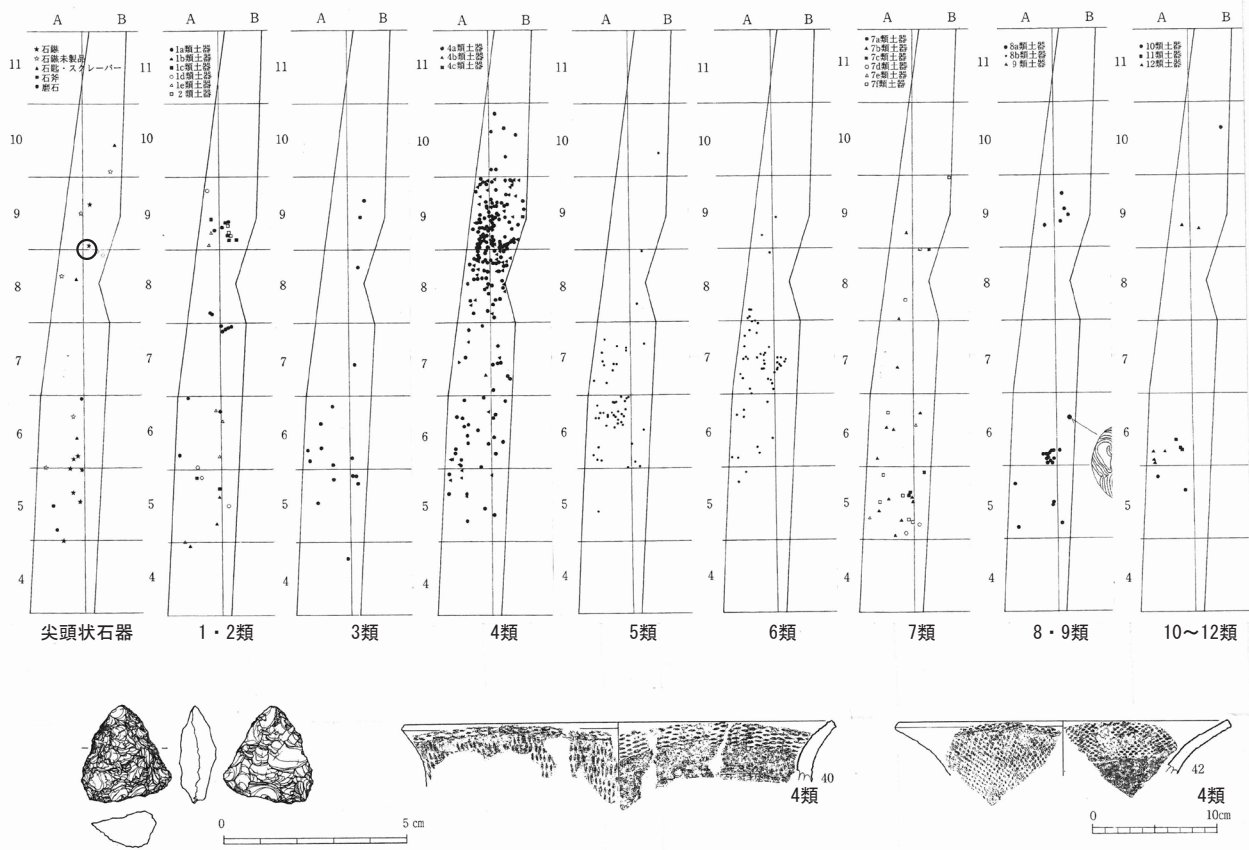
第7図 山口遺跡・B-4区出土の尖頭状石器と土器



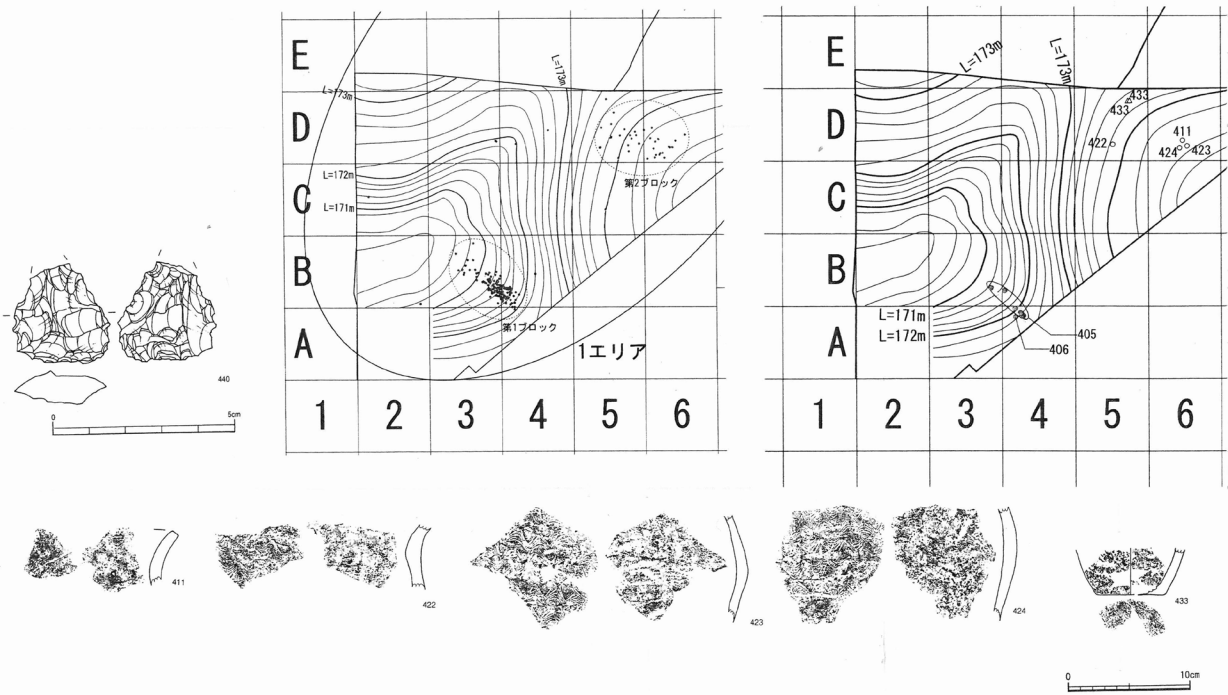
第8図 上野原遺跡4地点出土の尖頭状石器と土器



第9図 城ヶ尾遺跡A地区出土の尖頭状石器と土器



第10図 出水平遺跡出土の尖頭状石器と土器



第11図 蕨野B遺跡1エリア第2ブロック出土の尖頭状石器と土器

田式土器にかけての段階の遺跡ないしは遺物出土区域からは尖頭状石器はほとんど確認出来ない。その一方で、押型文土器や平椀・塞ノ神式土器と言った早期中葉から後葉にかけての土器が出土する遺跡では尖頭状石器も出土している。

以上の点をまとめると、尖頭状石器の出現は、南九州貝殻文系土器においては石坂式土器以降、外来系土器としては、押型文土器や中原式土器などを含む早期中葉とし、平椀・塞ノ神式土器の後葉にかけての土器とも共存する石器であると言える。筆者はこれまで出現期を押型文土器と漠然と述べるにとどまっていたが、今回の作業でより踏み込んで紹介出来たと思う。鹿児島県の発掘調査では、包含層から出土する遺物を点上げしてその位置を記録しており、この成果を丹念に積み重ねていくことで、共存関係は整理されていくものと期待したい。

尖頭状石器とは突き刺すことを目的とした重量のある石器である。石材選択に特徴があり、チャートや珪質岩、安山岩や玉髓などの非黒曜石を多用する。前期以降に見られる石銛と出自や系譜が同じであるのかは現時点では不明であり（註1）、石鏃未製品やスクレイパーなどとの区別も容易ではない。このことは先学によって指摘されているところである。そして、尖頭状石器は、鹿児島県では縄文時代早期中葉に出現し、早期後半まで出土していることがわかった。この早期中葉段階の本県を含む南九州は、南九州貝殻文系土器の分布域に押型文土器や中原式土器と言った外来系とされる土器が見られる段階である。その前段階において器種として確認されない石器が出土すると言うことは、単に土器のみが移動あるいは展開するのではなく、様々な生活様式の変化をもたらしたとことを示唆していると考えたい。むろん、時間的な前後関係も考慮しなくては行けないが、尖頭状石器そのものは、前平式土器や吉田式土器といった早期前葉の南九州貝殻文系土器を使用する集団には見られない石器の器種である。今後は、筆者の見落としも含め、異なる素材の道具など、無いことの証明を改めて進め、その出現の背景をより明らかにしていく必要がある。一方で、木葉形の尖頭器は鹿児島市前平遺跡や前原遺跡といった古手の南九州貝殻文系土器と共に出土している。この点は注意が必要である（註2）。

さて、石坂式土器以降に押型文土器との接点が生まれ、南九州で出土する土器の施文手法が貝殻施文から回転施文へと変化する。その背景には、食料獲得に対する変化、気候や動植物相も含めた環境の変化とそれによる生活様式の変化等が想定されるが、未だに解決できていない。多角的な検討がより求められよう（註3）。

6 おわりに

今回の報告のきっかけとなった春日堀遺跡は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査された縄文時代早期の集落遺跡で、竪穴建物跡30軒、連穴土坑121基をはじめとする遺構群と1万点以上の遺物から成る。これらの

膨大な情報は、個々の情報を鈍らせ、また、担当の力量によって未消化のまま問題の先送りを余儀なくさせてしまった。加えて、過去に報告したものが今回改めて検討した結果、自身の器種認定の甘さを露呈する結果にもなった。反省である。だが、春日堀遺跡の整理作業に従事でき、尖頭状石器について考えることが出来たことは幸いであった。東九州自動車道建設に伴って発掘調査された遺跡は数多く、その調査対象面積も広大で遺物量も多い。この30年余りで得られた情報は計り知れない。今後も、遺跡から得られる情報をより多く活用し、当該期の研究を進めて行かなくてはと思う。引き続き精進していきたい。

謝辞

春日堀遺跡報告書作成では、長野眞一、西谷彰、鮫島慎吾、佐藤武大、上床真、兒島直美、松山初音の各氏から、業務に従事しながら多くの示唆を得た。また、資料の実見や小稿執筆において多くのご教示を得ることが出来た。末筆であるが、名前を記し感謝申し上げたい。

岩元康成 今村結紀 相美伊久雄 坂本嘉弘
高吉伸弥 堂込秀人 深野信之 馬籠亮道 宮崎大和

註

1) 枕崎市奥木場遺跡では、縄文時代早期とされる石銛が出土している。研究史において触れた荒園遺跡も同様である。また、城ヶ尾遺跡においても石銛の形状に酷似する資料が出土している。これらが尖頭状石器とどのような関係になるか、事例の増加を待ちたい。

2) 縄文時代草創期から早期の尖頭器をまとめた高吉伸弥氏は、資料集成を行った上で、これらを製作技術の観点から2つに大別している（高吉2021）。

3) 重量が必要な狩猟具は、対象動物が中・大型で比較的近い距離から強い殺傷能力が必要な場合と、水の抵抗や浮力に対する場合の2つしか頭に浮かばない。文明社会住人の経験と思考力の限界である。この点に関して民俗事例などを含めて精査したい。

【引用・参考文献】

- 秋成雅博(2015)「船引地区遺跡群における縄文時代早期の石器の様相」『貝殻文と押型文』宮崎県考古学会県南実行委員会
- 井ノ上秀文(1982)「第3章遺物 b 石器類」『政所馬渡』別府大学附属博物館
- 上杉彰紀(2005)「第三章 3 出土遺物の分類」『第IX章 2 第VI・VII層の調査』『建昌城跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)始良町教育委員会
- 賀川光夫・下村悟史(1982)「第4章 研究と考察」『政所馬渡』別府大学附属博物館
- 黒川忠広(2000)「第9章第4節縄文時代早期の石器につ

- いて」『上野原遺跡第2～7地点縄文時代早期編』
鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(41)
- 黒川忠広(2022)「第VI章第2節 2石器」『春日堀遺跡
2縄文時代早期編』(公財)埋蔵文化財調査センター
発掘調査報告書(48)
- 坂本嘉弘(1986)「2縄文時代早期の遺物(2)石器2」
尖頭状石器」『菅無田遺跡』野津町教育委員会
- 高吉伸弥(2021)「第VI章総括 第2節遺物 3尖頭器」
『山ノ段遺跡』(公財)埋蔵文化財調査センター 発
掘調査報告書(36)
- 堂込秀人(2019)「南九州縄文時代の磨製石鏃考」『中山
清美と奄美学』奄美考古学会
- 堂込秀人(2020)「南九州縄文時代早期の石鏃の編年につ
いて」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集
—』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
- 堂込秀人ほか(2022)「第IV章第2節4遺物(石器)」
『荒園遺跡2』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘
調査報告書(43)
- 徳永愛雄・平美典(2017)「第3節出土遺物の分類2石
器」『田原迫ノ上遺跡2』(公財)埋蔵文化財調査セ
ンター発掘調査報告書(15)
- 富田逸郎(2001)「第4章第8節2(3)石器・石製品」
『上野原遺跡(第10地点)』鹿兒島県立埋蔵文化財セ
ンター発掘調査報告書(28)
- 富田逸郎(2013)「第4節 縄文時代早期の調査 3遺物
(2)石器」『山口遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(179)鹿兒島県立埋蔵文化財セ
ンター
- 馬籠亮道・長野眞一(2003)「第IV章第4節 縄文時代
の石器」『城ヶ尾遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(60)
- 八幡一郎・賀川光夫(1955)『早水台』大分県文化財調査
報告第3輯 大分県教育委員会
- 横山邦継(1970)「V 石器」『稻荷山遺跡緊急発掘調査』
大分県文化財調査報告第20・21合輯 大分県教育委員会
- センター発掘調査報告書(25)
- (2022)『荒園遺跡2』(公財)埋蔵文化財調査セン
ター発掘調査報告書(43)
- (2022)『春日堀遺跡2縄文時代早期編』(公財)
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(48)
- 鹿兒島県立埋蔵文化財センター
- (2001)『上野原遺跡(第10地点)』鹿兒島県立埋
蔵文化財センター発掘調査報告書(28)
- (2002)『上野原遺跡第2～7地点縄文時代早期編』
鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報
告書(41)
- (2002)『出水平遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(43)
- (2003)『城ヶ尾遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(60)
- (2005)『桐木耳取遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(91)
- (2007)『蕨野B遺跡ほか』鹿兒島県立埋蔵文化財セ
ンター発掘調査報告書(109)
- (2009)『桜谷遺跡ほか』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(138)
- (2013)『山口遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書(179)
- 郡山町教育委員会(2003)『湯屋原遺跡』郡山町埋蔵文
化財発掘調査報告書(2)
- 知覧町教育委員会(2003)『前原遺跡群』知覧町埋蔵文
化財発掘調査報告書第11集

【発掘調査報告書】

- 始良町教育委員会(2005)『建昌城跡』始良町埋蔵文化
財発掘調査報告書(10)
- 有明町教育委員会(2004)『浜場遺跡・下堀遺跡』有明
町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 鹿兒島県教育委員会(1981)『中尾田遺跡』鹿兒島県埋
蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 鹿兒島県教育委員会・(公財)埋蔵文化財調査センター
(2017)『永吉天神段遺跡2第2地点—1』(公財)
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(13)
- (2017)『田原迫ノ上遺跡2』(公財)埋蔵文化財調
査センター発掘調査報告書(15)
- (2018)『天神段遺跡3』(公財)埋蔵文化財調査セ
ンター発掘調査報告書(18)
- (2019)『細山田段遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査

表2 尖頭状石器観察表①

遺跡番号	遺跡名	資料番号	報告書掲載番号	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	短軸 : 長軸	幅 : 厚さ
1	山口遺跡	1	267	CC	2.8	2.3	1.0	3.9	1 : 1.2	1 : 0.4
2	桜谷遺跡	2	659	CH	2.2	1.8	0.6	1.7	1 : 1.2	1 : 0.3
2	桜谷遺跡	3	661	CC	2.5	1.8	0.7	2.7	1 : 1.4	1 : 0.4
2	桜谷遺跡	4	702	CH	1.8	2.0	0.7	2.2	1 : 0.9	1 : 0.4
2	桜谷遺跡	5	703	CH	2.3	(2.0)	0.6	(2.6)	-	-
2	桜谷遺跡	6	713	CC	(2.7)	(2.0)	0.9	(3.6)	-	-
3	南一ノ谷遺跡東側	7	9	OB	2.0	2.0	0.8	2.0	1 : 1.0	1 : 0.4
3	南一ノ谷遺跡東側	8	10	CC	2.3	1.8	1.0	1.8	1 : 1.3	1 : 0.5
4	前原遺跡西側	9	52	OB	2.3	2.0	0.9	3.3	1 : 1.1	1 : 0.5
5	湯屋原遺跡	10	885	CC	3.1	2.6	1.3	8.1	1 : 1.2	1 : 0.5
6	建昌城跡	11	1	CC	2.9	1.8	0.8	4.0	1 : 1.6	1 : 0.4
6	建昌城跡	12	5	CC	3.0	2.2	0.7	4.0	1 : 1.4	1 : 0.3
6	建昌城跡	13	8	OB	3.0	2.3	1.1	9.0	1 : 1.3	1 : 0.5
7	中尾田遺跡	14	430	OB	2.3	1.8	0.7	1.9	1 : 1.3	1 : 0.4
8	上野原遺跡4地点	15	308	CH	2.9	2.4	1.1	5.7	1 : 1.2	1 : 0.5
8	上野原遺跡4地点	16	309	CH	2.7	2.2	1.2	5.4	1 : 1.3	1 : 0.5
8	上野原遺跡4地点	17	310	CH	3.3	2.8	1.2	7.3	1 : 1.2	1 : 0.4
8	上野原遺跡4地点	18	311	CH	2.6	1.9	0.9	3.0	1 : 1.4	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	19	7	AN	4.9	3.1	1.0	10.8	1 : 1.6	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	20	8	AN	4.2	2.8	0.9	9.7	1 : 1.5	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	21	9	AN	4.7	3.2	1.1	4.0	1 : 1.5	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	22	10	AN	4.1	2.5	0.8	7.8	1 : 1.6	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	23	11	OB	3.7	2.4	0.9	5.6	1 : 1.5	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	24	12	AN	3.3	2.2	0.9	7.9	1 : 1.5	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	25	13	AN	4.1	2.9	0.9	9.9	1 : 1.4	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	26	14	OB	3.2	2.7	0.9	6.0	1 : 1.2	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	27	15	AN	3.7	3.0	1.0	9.7	1 : 1.2	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	28	16	OB	3.5	3.0	1.2	10.8	1 : 1.2	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	29	17	OB	3.3	3.1	1.3	11.8	1 : 1.1	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	30	18	AN	4.5	2.5	0.8	7.3	1 : 1.8	1 : 0.3
10	城ヶ尾遺跡	31	302	OB	(2.4)	(1.7)	0.8	(3.0)	-	-
10	城ヶ尾遺跡	32	304	SH	2.4	2.2	0.8	3.1	1 : 1.1	1 : 0.4
10	城ヶ尾遺跡	33	306	SH	3.2	2.7	0.9	5.7	1 : 1.2	1 : 0.3
10	城ヶ尾遺跡	34	352	OB	2.7	2.2	1.3	5.4	1 : 1.3	1 : 0.6
11	桐木耳取遺跡	35	1017	OB	3.1	2.3	1.0	6.6	1 : 1.4	1 : 0.4
11	桐木耳取遺跡	36	1327	CH	3.0	2.1	0.6	3.5	1 : 1.4	1 : 0.3
11	桐木耳取遺跡	37	1329	CH	3.0	2.2	0.9	4.7	1 : 1.4	1 : 0.4
11	桐木耳取遺跡	38	1330	AN	3.1	2.1	0.8	4.6	1 : 1.5	1 : 0.4
11	桐木耳取遺跡	39	1331	SH	3.1	2.6	0.9	5.8	1 : 1.2	1 : 0.3
11	桐木耳取遺跡	40	1751	OB	1.9	1.8	0.8	2.4	1 : 1.0	1 : 0.4
12	出水平遺跡	41	273	CC	2.8	2.5	1.1	5.0	1 : 1.1	1 : 0.4
13	蕨野B遺跡	42	440	SH	(2.8)	2.7	0.9	6.8	-	1 : 0.3
13	蕨野B遺跡	43	518	CH	(2.6)	2.2	0.5	2.9	-	1 : 0.2
13	蕨野B遺跡	44	519	CH	(3.1)	2.8	1.1	8.0	-	1 : 0.4
13	蕨野B遺跡	45	522	OB	(2.5)	2.4	0.7	3.8	-	1 : 0.3
13	蕨野B遺跡	46	570	CH	2.9	2.4	0.5	3.3	1 : 1.2	1 : 0.2
13	蕨野B遺跡	47	571	CH	(3.2)	(2.6)	0.8	5.9	-	-
14	天神段遺跡VII層	48	1917	OB	1.7	1.5	0.7	1.4	1 : 1.2	1 : 0.5
14	天神段遺跡VII層	49	1919	CC	2.0	1.9	0.9	3.0	1 : 1.0	1 : 0.5
14	天神段遺跡VII層	50	1922	AN	2.0	1.9	0.8	2.0	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VII層	51	1924	CC	2.3	2.1	0.9	3.2	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VII層	52	1926	AN	2.4	2.4	1.1	4.2	1 : 1.0	1 : 0.5
14	天神段遺跡VII層	53	1928	CH	(2.5)	2.4	0.7	3.0	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡VII層	54	1930	CH	2.9	2.0	0.6	3.2	1 : 1.5	1 : 0.3
14	天神段遺跡VII層	55	1931	OB	2.8	1.9	0.9	4.0	1 : 1.5	1 : 0.5
14	天神段遺跡VII層	56	1933	CH	(3.7)	3.2	0.9	9.4	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡VII層	57	1934	CH	3.3	2.6	1.0	6.8	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡VII層	58	1935	CH	4.0	2.8	1.2	10.4	1 : 1.4	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	59	2307	CH	2.0	1.9	0.7	1.9	1 : 1.0	1 : 0.3
14	天神段遺跡VI層	60	2308	CH	2.3	2.0	0.9	3.3	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	61	2309	CH	2.2	2.1	0.7	2.4	1 : 1.1	1 : 0.3

表3 尖頭状石器観察表②

遺跡番号	遺跡名	資料番号	報告書掲載番号	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	短軸 : 長軸	幅 : 厚さ
14	天神段遺跡Ⅵ層	62	2310	AN	(2.0)	2.0	0.7	2.2	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅵ層	63	2314	AN	(2.1)	2.4	0.8	3.6	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅵ層	64	2315	AN	2.8	2.5	1.0	5.2	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	65	2502	CH	2.0	1.6	0.8	1.6	1 : 1.3	1 : 0.5
14	天神段遺跡Ⅵ層	66	3169	OB	1.6	1.5	0.6	1.1	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	67	3182	OB	2.2	1.9	0.8	2.9	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	68	3184	AN	2.3	2.0	0.9	3.2	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	69	3191	OB	(2.1)	2.0	1.4	5.2	-	1 : 0.7
14	天神段遺跡Ⅵ層	70	3195	CH	2.4	2.2	1.0	3.0	1 : 1.1	1 : 0.5
14	天神段遺跡Ⅵ層	71	3197	AN	2.4	2.2	0.8	3.1	1 : 1.1	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅵ層	72	3198	CH	2.6	1.9	0.9	4.2	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	73	3200	CH	2.6	2.1	0.7	3.3	1 : 1.2	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅵ層	74	3201	CH	2.5	2.5	1.0	5.1	1 : 1.0	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	75	3208	CH	(2.8)	(2.1)	0.8	4.4	-	-
14	天神段遺跡Ⅵ層	76	3210	AN	3.0	2.3	0.9	4.3	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	77	3211	AN	3.2	2.3	0.9	5.8	1 : 1.4	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	78	3213	SH	3.2	2.6	0.9	4.5	1 : 1.3	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅵ層	79	3218	CH	3.3	2.5	1.0	6.3	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	80	3219	CH	3.5	2.9	1.3	10.2	1 : 1.2	1 : 0.5
15	田原迫ノ上遺跡	81	1034	OB	3.2	3.1	0.8	7.1	1 : 1.0	1 : 0.3
15	田原迫ノ上遺跡	82	1035	OB	2.6	2.2	1.1	4.7	1 : 1.2	1 : 0.5
15	田原迫ノ上遺跡	83	1036	HF	2.6	2.3	0.6	4.1	1 : 1.1	1 : 0.3
15	田原迫ノ上遺跡	84	1037	CH	(2.5)	2.4	0.4	2.6	-	1 : 0.2
16	細山田段遺跡	85	320	SH	2.6	2.3	0.5	3.5	1 : 1.1	1 : 0.2
17	永吉天神段遺跡	86	476	SH	3.7	3.0	1.2	11.5	1 : 1.2	1 : 0.4
17	永吉天神段遺跡	87	508	AN	3.4	2.4	0.9	7.4	1 : 1.4	1 : 0.4
18	荒園遺跡	88	726	AN	2.3	2.0	1.1	4.0	1 : 1.1	1 : 0.5
19	浜場遺跡	89	110	AN	2.8	1.7	0.9	3.4	1 : 1.6	1 : 0.5
19	浜場遺跡	90	111	AN	2.8	2.0	0.7	3.1	1 : 1.4	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	91	277	OB	2.2	(1.6)	0.4	0.7	-	-
20	春日堀遺跡	92	278	CH	2.1	1.6	0.9	2.6	1 : 1.3	1 : 0.6
20	春日堀遺跡	93	279	CH	2.4	1.9	0.7	2.5	1 : 1.3	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	94	280	CH	1.9	1.8	0.5	1.6	1 : 1.1	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	95	281	CH	(2.1)	(1.8)	0.6	(1.9)	-	-
20	春日堀遺跡	96	282	HF	2.2	1.6	0.8	2.0	1 : 1.4	1 : 0.5
20	春日堀遺跡	97	283	CH	2.5	1.5	0.5	1.3	1 : 1.7	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	98	284	CH	2.4	2.0	0.9	3.1	1 : 1.2	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	99	285	CH	1.8	1.5	0.7	1.5	1 : 1.2	1 : 0.5
20	春日堀遺跡	100	286	CH	(2.1)	(1.4)	0.6	(1.6)	-	-
20	春日堀遺跡	101	287	CH	2.3	1.9	0.7	1.9	1 : 1.2	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	102	288	CH	(1.7)	(1.8)	0.8	(2.2)	-	-
20	春日堀遺跡	103	289	OB	(2.0)	(1.5)	0.7	(1.9)	-	-
20	春日堀遺跡	104	290	CH	2.2	1.7	0.5	2.0	1 : 1.3	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	105	291	OB	(2.1)	(1.4)	0.6	(1.1)	-	-
20	春日堀遺跡	106	292	OB	2.2	1.8	0.8	2.7	1 : 1.2	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	107	293	SH	2.5	2.3	0.6	2.8	1 : 1.1	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	108	294	CH	2.3	2.1	0.8	3.0	1 : 1.1	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	109	295	AN	(2.4)	(1.7)	0.5	(1.4)	-	-
20	春日堀遺跡	110	296	CH	2.0	1.9	0.5	1.4	1 : 1.0	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	111	297	AN	(1.9)	(1.8)	0.5	(0.9)	-	-
20	春日堀遺跡	112	298	CC	2.0	1.7	0.8	2.2	1 : 1.2	1 : 0.5
20	春日堀遺跡	113	299	OB	3.0	1.4	0.4	0.8	1 : 2.1	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	114	300	CH	2.8	2.3	0.5	2.8	1 : 1.2	1 : 0.2
20	春日堀遺跡	115	301	CH	(2.7)	(2.1)	0.6	(3.3)	-	-
20	春日堀遺跡	116	302	CH	2.8	2.0	0.6	2.4	1 : 1.4	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	117	303	CH	2.8	2.2	2.9	4.2	1 : 1.3	1 : 1.4
20	春日堀遺跡	118	304	CH	3.2	2.8	1.2	7.8	1 : 1.1	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	119	305	CH	3.7	2.7	1.2	9.1	1 : 1.4	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	120	306	CH	(3.1)	(3.1)	1.1	(7.4)	-	-
20	春日堀遺跡	121	307	CH	2.7	2.5	1.1	7.4	1 : 1.1	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	122	308	TF	3.1	2.6	0.9	6.2	1 : 1.2	1 : 0.4

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第15号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
